

---

# ジャムと紅茶のポットな関係

河村 和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャムと紅茶のポットな関係

### 【コード】

N80900

### 【作者名】

河村 和

### 【あらすじ】

こんな風であればいいと思う、目覚め。

(前書き)

私としては未完ではありませんが、終わらせる責任を問う方もいらっしゃるかもしれません。

最高の目覚めだ。

とても爽やかな気分だ。まるでたんぼのあぜ道で、風が体を通り抜けていったみたいだ。

アマガエルの声も聞こえる。

夢を見ていたことも、それが夢だったことも、どんな夢だったかも憶えている。

とても爽やかな気分だ。

耳元でもう一度、アマガエルの声を聞いた。

「おはよう、もう、朝なんだね」

僕はアマガエルに挨拶をした。彼女はそっと、右の掌を僕の頬にのせた。

アマガエルは微笑みながら「ええ、朝なの。今日はどんな夢を見ていたの？」と、優しい声で言った。

彼女の名前はアマガエル。黒に少し緑がかった長髪が綺麗な女の子。微笑むと左頬にえくぼが見える。いつもレンゲの香水をつけて、静かに暮らしている。白のワンピースが眩しかった。

僕は目を細めて言った。

「高い山に登っているんだ。僕は、もちろん君も。赤々と燃える太陽が昇ってくるのを、高い山の頂上で眺めているんだ。辺りは岩だらけで、雲が下の方に敷き詰められて、まるで絨毯みたいなんだ。太陽の光が反射して……ちょうど君のワンピースみたいに、眩しくて、綺麗だったなあ」

アマガエルは頬に置いた手で、今度は僕の頭を撫でながら言った。

「いい夢ね。私も見られるかしら」

「きつと見られるよ。僕だつて見られたんだから」

彼女の手は温かく、柔らかく、マシユマロのようにすべすべしていて、気持ちいいんだけど、僕を何故か、むずがゆい気持ちにさ

せる。

甘いレンゲの匂いが、僕の頭に響いた。

「ねえ、今日の朝ご飯はなに？ お腹空いちゃったよ。君はいつも良い匂いだからさ。お腹が減って来ちゃうんだ」

「そうね。あなたはいつもそう。いつだって、お腹を空かせてるんだから」

そう言いつつ、彼女は右手で口を隠して笑った。

僕の頭から、その手が離れるときも、僕はなんとなくむずかゆい気持ちになった。

彼女はステップを踏むようにターンしながら言った。

「今日のご飯はないしょ。あなたは想像でお腹いっぱいになっちゃう人ですもの。そう、ないしょ、よ」

彼女は踊子のような軽い足取りと、あの魅力的な笑顔で部屋を出て行った。

「ちえ、でも。アマガエルの料理はおいしいからな」

独り言を呟いて、僕はベッドから飛び降りた。彼女と同じところを踏んだはずなのに、床はぎしぎしと音を立てた。いつもそうだ。

部屋を出ると、良い匂いがした。それはあのレンゲの匂いであったし、コーンスープの匂いでもあった。トーストが焼けて、蜂蜜が広げられた匂いもした。

僕はもう、朝ご飯の半分を食べたような、満足した気持ちになっていた。

テーブルでは、アマガエルがトーストを嚙っている。

「今日もすごく、おいしそうだね」

彼女は笑顔で食事をする。

そのえくぼも可愛らしいけれど、とても、おいしそうに食べて、幸せだって、感じさせる。僕はなんとなく、お腹いっぱいになったような、そんな気分させられた。

パンもコーンスープも、全て彼女の手作りだ。

誇るように胸を張ってアマガエルは応えた。

「ええ、すごくおいしいのよ。あなたも早く食べて、今日はどこにいくのか考えましょう」

僕もきつね色に焼けたトーストを頬張り、コーンスープを飲んだ。彼女はトーストに蜂蜜をかけるけど、僕はかけない。トーストの焼けた匂いや、ふつくらとした口触り、小麦の甘さが、僕には丁度良いのだ。コーンスープと合わせて食べると、僕の朝ご飯はこれだけでいいという気持ちになってしまう。

実際に、一週間のうち三日は、この朝ご飯のだけれど。

彼女はトーストを一枚食べ終わる度に少し目を閉じて、余韻に浸るような表情をしている。彼女にとってトーストを食べるということはなにか、儀式めいた、幸せの証明なのかもしれない。

僕はトーストを一枚食べ終わり、コーンスープも飲んでしまうとキッチンへ向かい、口直しの紅茶を注ぐ作業にかかった。この、紅茶をいれるという作業が僕の朝ご飯における唯一の仕事だ。

彼女はポットに触りたくないし、葉っぱの加減もわからない。なぜポットに触りたくないか彼女に聞いたことがあるけれど、なんとなく触りたくないらしい。つまりは、理由らしい理由はないということ。

僕がお湯を沸かし、紅茶の抽出を終えて、キッチンから戻ると、彼女は四枚目のトーストを食べて、余韻に浸っているところだった。コーンスープも切れて、待ってたのよ、と両手を胸の前で合わせる彼女は、いつみても可愛いと思う。

僕はカップに注いだ紅茶を彼女に渡した。彼女はポットに触りたくないからだ。

「うん、おいしい。でも、ポットに触らせてごめんね」と、彼女は言った。僕としては、こんなことで彼女に感謝されるくらいなら、一日中だってポットを離さないところだ。でも、ポットを離さなければ、彼女も僕に触れてくれないから、僕はポットとほどよい距離を保って生活している。

「君が喜んでくれると嬉しいよ。今日はどこに行こうか」

彼女がポットを何故嫌っているのかという話は、もうずっと前に締め切った。彼女はポットが嫌いなんじゃなくて、ただ、触りたくないだけなんだ。このポットだけじゃない、他のポットも、触りたくないだけなんだ。

僕は今日、どこにいくことになるか、なんとなく分かっていた。多分彼女は山に登る。高い山に。僕が夢で見た、あの高い山で、明日の朝日か、今日の夕日を長めながら、自分のワンピースのような雲の絨毯を眺めに行く。いままでだってそうだった。僕が森で小鳥と話す夢を見たら、小鳥と話に行くことになったし、きつとそうなのだ。

彼女は目を閉じ、紅茶に、例の余韻を感じるような仕草を見せていた。幸せを感じているのか、山に登ることを考えているのか、僕には分からなかったけれど、彼女は幸せそうに見えた。

「あなたの紅茶はおいしいわ。私もポットに触らなければ、ねえ」  
僕は苦笑いしながら、「そうだね」と応えておいた。

一度、彼女はお鍋で紅茶を作った。その時はキッチンが紅茶の匂いでいっぱいになってしまった。なにせ彼女ったら、お茶の葉を鍋底に敷き詰めるほど使っているんだもの。それ以来、彼女は紅茶に触らないことを僕と約束した。

「私も夢を見たの。湖を見る夢。とても高いところから、鳥になっ  
たみたいだね。あなたも隣にいたわ。なんだか退屈そうだったけど、  
どうしてかしらね。今日は湖を見に行きたいわ。とても高いところ  
から眺めてみたいの」

アマガエルは天井を眺めた。正確には、天井のもつと向こう側、  
鳥たちが飛ぶよりも、ずっと高いところを。

彼女が遠くを眺める姿に、僕はいままでの彼女を見た。今の彼女  
よりも、もつともつと昔の彼女を、小さかったアマガエル。レンゲ  
の花冠がとても似合っていた。もちろん、いまでもきつと魅力的だ。  
シロツメクサの指輪も。

「ねえアマガエル。君が見た湖はどんな形だったか憶えてる？」

アマガエルは、ええ、もちろん、と言いたそうな自慢げな笑顔で応えた。

「卵を横にしたみたいなの形だったわ。蓮の葉が所々に、あんまり沢山じゃないのよ？ でもそれがとても綺麗だったわ。沢山じゃないのがね」

僕は沢山の蓮の葉が湖を埋め尽くした場面を想像した。

次に、僕が形容詞的に想像したのはジャムと紅茶の関係だった。ジャムを入れすぎて紅茶だかジャムだか分からなくなったカップは、形容しがたいものに感じられた。ジャム瓶でもないしティーカップでもない。

「ジャムカップには僕も触りたくないな、君がポットに触りたくないみたいに」

僕は独り言を、心に浮かんだことを言葉にしてしまう癖があるんだ。時々ね。彼女はそれを聞いても涼しい顔だけどさ。ちよつと気にしてるんだ。自分でも。

「あなたっておもしろい人ね。でもそうね。なんとなくわかったわ、私にも」

彼女はそう言ってフツと、自然と不自然の間くらい、とても不思議な、神秘的な笑顔で笑った。

「そうね。山に登りましょう。どうしてあなたの夢は私の夢と繋がってるのかしら、高い山から卵形の湖を見るの、名案じゃない？」

僕は静かに頷いた。紅茶を口に含むと、温かさが広がるように、その光景がありありと脳裏に浮かんできた。喉の奥から背筋に、そんな具合に。

「ああ、素敵な偶然だし、名案だ。それに、君はすごくキュートだ」  
彼女は手に着いたトーストの粉を払い、スプーンで紅茶をゆつくりかきまぜているところだった。彼女はいつも、食事の終わりに紅茶をかきまぜるのだ。

それから、二人でお皿を洗ったり、テーブルを拭いたりした後、

紅茶をもう一杯飲んだ。

「ねえ、あなた、もう山に登って湖を見たんじゃない？」

僕は頭をかきながら、「君は？」と、聞き返した。

(後書き)

読んでいただけたとしたら、幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8090o/>

---

ジャムと紅茶のポットな関係

2010年11月18日20時40分発行